

ちよつといい話

～ うつせみ ～

28号にて朝に希望、夕べに感謝のお話をしましたが、佛教の宇宙観は中心に須弥山（しゅみせん）と言う仏様の世界、極楽があり、遙か南方の地が我々の住む地球、太陽系になり、佛教では南閻浮提（なんえんぶだい）、あるいは南閻浮洲と呼んでいます。我々が今、喜怒哀楽の生活を送っているのは現身（うつせみ）から往生身に向かうテスト期間なのです。テストに合格しなければ、もちろん極楽には行けません。死ねば仏とは良く言ったもので、仏ではなく、ほっとけなのです。ほっとけの世界はテレビでよく取り上げる心霊現象として出てくる様に成ってしまうのです。極楽は阿弥陀経に因れば苦のない世界で楽しい事、極（きわ）まりない世界、だから極楽なんだ、と説明されてます。死して花咲き、実のなる行いを実践しなくては阿弥陀様から、極楽への切符は頂けません。極楽に関しましては第3号、第10号、第14号、第15号等を参照して下さい。そして、実践に関しましてはちよつといい話をちよつと参考にして頂けたらと思います。与える側の仏の心、即ち加と求める側の人々の心、即ち持（25号参照）が一つに和合した時、大輪の花が咲くのです。舍利禮文にも次の様に説かれています。「爲我現身、入我我入、佛加持故、我證菩提、…」お経に因って説明の仕方は色々ですが、思うに現在の親を気持ちよく看取り、来世の親に会うを楽しみに日々を送れば良いのでしょうか。未来の親とは阿弥陀様のことなり。